

水産研究所地先のホンダワラ類

県内沿岸の藻場は大まかに2種類に大別でき、それぞれ海草のアマモ場と褐藻のホンダワラ類が主体のガラモ場です。アマモ場は砂地に形成され、概ねアマモのみが植生していますが、岩礁、転石帯に形成されるガラモ場にはホンダワラ類の他、ワカメ、アオサ、紅藻類などが混生しています。アマモ場、ガラモ場ともに魚介類とその餌料生物の生息場所として、また窒素やリン等を吸収、放出するなど海水中の物質循環の一部として重要な役割を担っています。

アマモ場の維持、再生については県内各地で種まきの取組みが行われています。ガラモ場についても魚礁の設置や母藻の投入などが行われてきましたが、年毎の消長もあって効果が持続しにくいといった課題があります。水産研究所では、今後県内のガラモ類の増殖手法について検討を進め、取組み方法を提案していきたいと考えています。

ホンダワラ類は冬季から春季に繁茂し、成熟して卵を放出します。当研究所地先では、主に

アカモク、タマハハキモク、ヒジキの植生が見られます。図に令和元年12月から翌年7月までの3種の全長推移と成熟状況を示しました。ホンダワラ類は場所によって生長や成熟時期が異なりますが、当研究所地先ではアカモクの生長が最も早く、2月中旬に全長が最大となり、次いでタマハハキモクが4月初旬に、ヒジキは5月下旬に最大となりました。成熟については、アカモクが1月初旬に成熟して卵を放出しており、タマハハキモクは3月下旬に、ヒジキは6月下旬にそれぞれ卵を放出していました。

ガラモ場の具体的な増殖手法としては、卵を放出する時期の藻体をに設置する方法や、放出された卵(幼胚)が付着できるようコンクリートブロック等の基質を設置する方法等があります。ただし、これらの手法により供給された藻体が生長できる光や水質等の環境条件が必要です。今後、これらを踏まえて増殖手法を検討していく予定です。

(海面・内水面増殖研究室：清水)

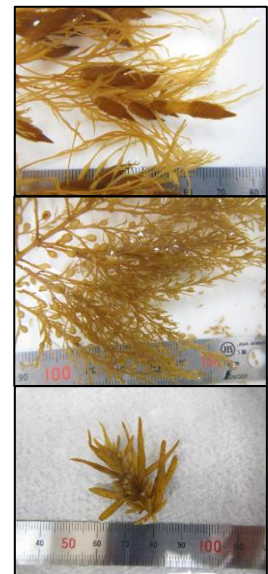
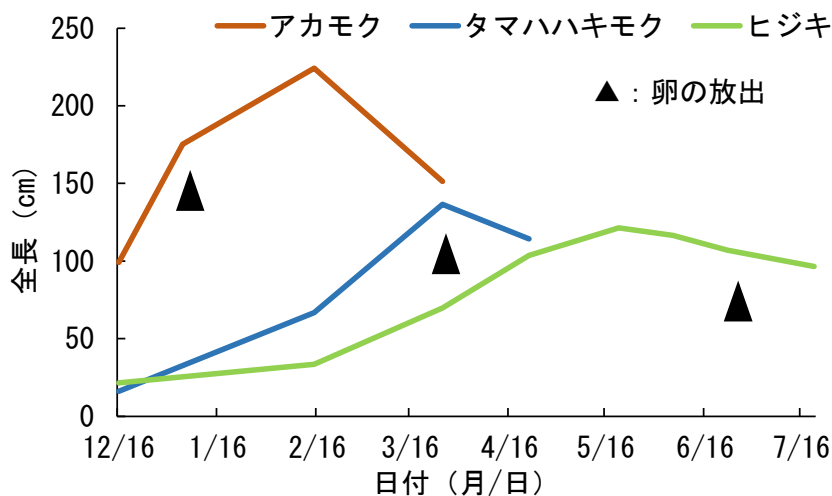


図 水産研究所地先のアカモク、タマハハキモク、ヒジキの全長 (令和元年12月~2年7月)
写真 上: アカモク、中: タマハハキモク、下: ヒジキ